

INTERVIEW

綾川町国民健康保険陶病院 病院長
大原昌樹先生



【プロフィール】 大原昌樹先生 昭和60年自治医科大学卒業、香川県立中央病院にて研修。昭和62年三豊総合病院内科・健康増進部、平成6年三豊総合病院内科医長、平成8年豊浜町国民健康保険介護老人保健施設「わたつみ苑」医師・副施設長(兼務)、平成10年三豊総合病院地域医療部管理医長・内科医長、平成17年より綾川町国民健康保険陶病院病院長に就任。平成12年から香川県介護支援専門員協議会長、自治医大臨床教授(地域担当)、香川大学医学部臨床教授、香川シームレスケア研究会代表世話人、香川県医師会常任理事、日本介護支援専門員協会理事、日本プライマリ・ケア連合学会指導医などを務める。

患者に寄り添う 地域病院が担う 大きな役割

聞き手：山田隆司 公益社団法人地域医療振興協会 地域医療研究所所長

総合病院の中で幅広く診る医師として

山田隆司(聞き手) 今日香川県綾川町の陶病院に大原昌樹先生を訪ねました。大原先生は今、この病院で院長としてご活躍されていますが、まずは経歴から簡単に紹介をしていただけますか？

大原昌樹 私は昭和60年に自治医大を卒業しました。8期生です。2年間、香川県立中央病院でスーパーローテーション研修を受けました。その後3年目に香川県のいちばん西の端の三豊総合病

院へ行きました。当時415床の病院で3期生の西原修造先生が赴任されていましたが、前年からへき地巡回診療を開始し人手を要するというところで私が入ったという形です。私は学生時代、ゆきぐに大和総合病院(現 南魚沼市立ゆきぐに大和病院)へ実習に行き、保健師さんの活動を見学して訪問診療や保健活動に興味があったので、内科診療のかたわら、徐々に始めていきました。

山田 その病院は地域医療に取り組む中核病院だったのですね。

大原 そうです。私が赴任した時にはもう退職されていたのですが、糖尿病の先生が熱心に予防活動の基礎を築いてきたということで、それを引き継ぐかたちで自治医大の卒業生が予防活動に取り組むようになりました。院長、副院長先生も熱心で、後押ししてくれました。

山田 三豊総合病院には西原先生以外にも卒業生はいたのですか。

大原 前年から7期生が赴任していましたが、交代で入りましたので、卒業生は2人でした。

その後、私は丸亀沖の広島という島に赴任する予定でしたが、西原先生がこの陶病院へ移られ、私に三豊総合病院の地域医療をやってほしいということで、そのまま残り健康増進部で活動を続けました。その後、平成8年に老健ができたので、そこの医師も兼任しました。

山田 三豊総合病院には何年いたのですか。

大原 18年間です。その間、内科では最も患者さんが多い消化器を担当していましたが、途中で血液の先生がいなくなってしまうため、6年ほど血液も診ていた時期があります。血液の患者

さんは結構多く、10～15人ぐらい入院患者がいました。週1回香川大学から非常勤の先生が来てくれたので、自分の能力では無理なところは、その先生に聞きながらやっていました。結局、院内の足りない部分を補っていたという感じですね。その後、血液の先生が常勤で赴任されたので、訪問診療を中心に担当しました。訪問は、がんとか、神経難病とか、一般の開業医さんがあまり取り組んでいないようなところを中心にしていました。

山田 在宅は入院患者が退院したしたあとをフォローするかたちですか。

大原 当初はそれが多かったですね。在宅では緩和ケアもやっていました。その後、緩和ケア病棟を作ってほしいという要望があり、平成12年に新病棟を開設する際に緩和ケア病棟ができました。12床全部が個室で県下でも最初の施設でした。

山田 先生は比較的大きな総合病院にしながら、巡回診療や訪問診療、健診、そして緩和ケアといった、総合的に診る役割を中心的に担っていたのですね。

大原 そうですね。ケアマネジャーの資格も取って2000年には香川県介護支援専門員協議会の会長になりました。また、地域の研究をしていましたが、ちょうど同じ2000年に自治医大地域医療学講座で、医学博士を取ることができました。だから大学に帰って研究をしたいという気持ちもありましたし、診療所へ行きたいという気持ちもあったのですが、地域とのつながりや人間関係もできてきたので、ずっと三豊にいるつもりになっていました。